

## 『縄文ムラの原風景』

### 『御所野遺跡から見てきた縄文世界』

御所野縄文博物館／編 新泉社（2020年）

御所野遺跡は、岩手県にある縄文時代のムラの遺跡です。五千年前から人が住み始め、約八百年のあいだムラとして続きました。本書では、御所野で発掘された動植物や建物の痕跡、道具、装飾品などをカラー写真で紹介し、調査で判明した当時の環境や人々の暮らしについて解説しています。例えば、遺跡から出土した矢じりや装飾品には、日本海側で産出したとみられる石が多数使われていました。御所野のムラには、遠く離れた土地からもたくさんの物資が運び込まれていたようです。



## 『ウナノハテノガタ』

大森兄弟／著

中央公論新社（2022年）

死を知らぬ海の民イソベリであるオトガイは、父親からとある役目を引き継ぐ。死を弔う山の民ヤマノベの少女のマダラコは、生贄の儀式から逃れて山をおりた。海で生きるものと山で生きるもの、本来交わらないはずのふたりが出会い、新たな命と神話が生まれる。すべてが始まる原始の物語。この本は、伊坂幸太郎の呼びかけで集まった8人の作家が、3つのルールのもと、原始から未来までの歴史物語を書いた小説のうちの1作目である。この本単体でも楽しめるが、ほか7作も続けて読むとまた別の発見がある。



## 『土偶界へようこそ 縄文の美の宇宙』

譽田 亜紀子／著 山川出版社（2017年）

土偶マニアの著者による、70体の土偶の解説本です。土偶は、縄文時代に土で焼かれた人形の焼き物です。その土偶の造形の面白さ、不可思議さ、かわいらしさ、に魅せられた作者は、日本各地を旅して博物館や遺跡を訪れ、縄文と土偶の研究をしてきました。70体の土偶を紹介する際、各土偶に作者目線で名前を付けています。「ストレッチ土偶」「パンツをはいた土偶」「赤いリボンの結髪土偶」など、ユニークで愛のこもった名前で、その名前の通り色んな形の土偶を、作者の着眼点で解説しており、読んだ者をみんな土偶好きにさせる内容です。



## 『空色勾玉』

荻原 規子／著 徳間書店（2005年）

輝の大御神と闇の氏族が争う戦乱の世に生まれた少女狭也は、光を愛し、輝の大御神に憧れを抱いています。そんな狭也ですが、祭りの日に出会った楽人から、自分が闇の氏族の姫の生まれ変わりだと知らされます。なかなかその話を受け入れられず苦しむ狭也は、憧れの輝の大御神から、采女になって一緒に都へ来いと言われ、その通りにすることを決めます。そして都で神殿に閉じ込められた稚羽矢と出会い、危険に満ちた不思議な運命が動き出します。

日本神話を下敷きにしたファンタジーを読んで、人々が想像した日本の始まりに思いを馳せてみるのはいかがでしょうか。



## 『弥生時代の歴史』

藤尾 慎一郎／著 講談社（2015年）

文字や暦のない遠い昔の年代を、教科書では紀元前とか〇〇年と書かれていますが、どうやって算出されているのか考えたことってありますか？考古学者たちは考古学的方法と自然科学的方法を用いて調べています。この本では、自然科学的方法のAMS（加速器質量分析法—炭素14年代測定法）で測定した全国の水田稲作のことが書かれています。稲作は伝来以来西日本、特に九州北部が中心で、東日本では縄文色の強い狩猟生活が行われていました。また東北では稲作を取り入れた後、放棄した地域もあるそうです。現代の米どころとの違い、考えると面白いですね。



## 『ときめく縄文図鑑』

譽田 亜紀子／著 山と溪谷社（2016年）

縄文時代は今から約1万5千年前から1万年以上続いたと考えられています。大規模な争いの痕跡がなかったこの時代の人々はどんなふうに暮らしていたのでしょうか。様々な出土品を通して縄文人の日常に思いを馳せていきます。縄文時代といえば土偶が思い浮かびますが、ユーモラスな土偶だけでなく犬やイノシシの土製品や腕輪などの装飾品、骨や角製の釣り針といった生活用品も数多く出土しています。中でも小さな子どもの手や足の跡の土版はいつの時代も子どもを思う親心は変わらないのだなと思わされます。そんな彼らの生きた証であるときめく品々を集めた図鑑です。

